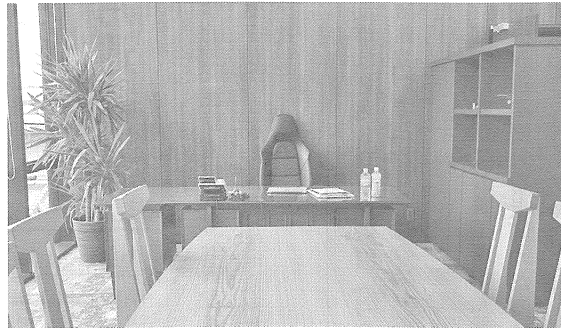
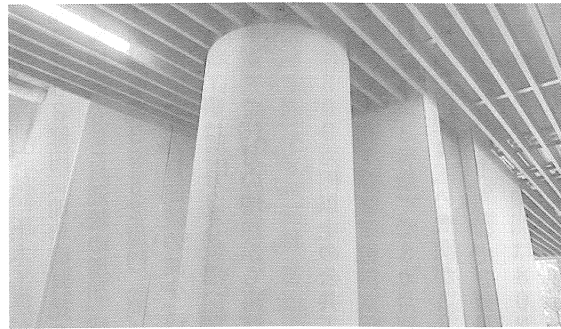


吹き抜けから見た明るい執務室(※)



社長室



美しい仕上がりのPC円柱



各自が退社時間を表示

の建築部材は同社が支給した。高さのあるPC丸柱は、材料分離が発生しないように型枠の下側からコンクリートを注入する方法を採用。苦勞して製造したが非常に美しく仕上がった荒川社長という。執務室内は木とコンクリートという正反対の素材をバランスよく組み合わせたい心地よい職場環境の実現をめざしており、自社製品を使った梁や丸柱は、あえてむき出しにして、スケルトンインフィルの見える化で企業アイデンティティを創出。自社製品のショールームとしての役割も担っている。また1階ロビーをはじめ、各フロアにはゆつたりとした開口部を設け、京都の北山杉で作ったチェアや、北山杉と自社製品を組み合わせたオリジナルのテーブルを配置した。地元・京都の木材を使うというのは荒川社長のアイデアだ。執務室内には十分なフリースペースが確保されており、従業員が働きやすいように様々な配慮がなされている。「見える化」が徹底されたオフィスは解放感がある一方、来訪者が一目でオフィス内を見ることが出来る。一定の緊張感をもつて働くことができる環境では、従業員の些細なケアレスミスは減り、結果として労働生産性が向上する。そんな印象を抱きながら、新本社屋を後にした。

(※はエスエス大阪支社による撮影)

のアプローチ動線の確保などを考慮して、前面道路に接して駐車スペースを確保し、石垣を隔ててオープンスペース(庭園)、さらに最奥に本社棟を配置した。また本社棟とは別に、前面道路に近い場所に本社棟への玄関口となるエントランス棟を設け、敷地境界に沿って本社棟と歩廊で連結。緑豊かな庭園の景観を楽しみながら本社棟に歩みを進める事ができるように、歩行者のアプローチ動線を確保した。この建物配置は、淀城が天守、櫓、多門櫓、城壁で構成されていたことを踏まえたもので、淀城の記憶を現代に再構築するという「基本コンセプト」を忠実に実現した設計となっている。城壁を駐車スペースの石垣、櫓をエントランス

棟、多門櫓を歩廊、天守を本社棟として、その中心に配置した庭園は、修景と来客者をもてなす役割を担う本丸と位置付け、四季の移ろいを感じられる植栽とした。また淀城は天守のシンボルとなる積層した屋根のファサードが特長となっている。これを踏まえて天守にあたる本社棟はガラスのファサードで覆い、城の重厚感と最新のオフィス空間という新旧の融合を表現した。また、屋根の積み重なりを「水平ラインの積層」と読み替えて、PC庇を用いて積層感を表現した。コンクリート製品メーカーという企業性を打ち出すため、外観にはコンクリート外壁を採用して重厚感を演出した。またエントランス棟には、7mの庇を使い大屋根

を形成。癒しやおもてなし空間としての役割を担うだけでなく、本社屋全体の景観に大きなインパクトを与えている。さらに埋蔵物文化財調査で出土した淀城の城壁の保存状態が良好で、京都市から貴重な文化財であるとして保存命令が出されたことから、これを保存。歴史との共存を図る狙いで、エントランスの床の一部をガラス張りにして展示空間を設け、遺構が見えるようにした。淀城の歴史を伝えるパネルと併せて、来客者に紹介している。

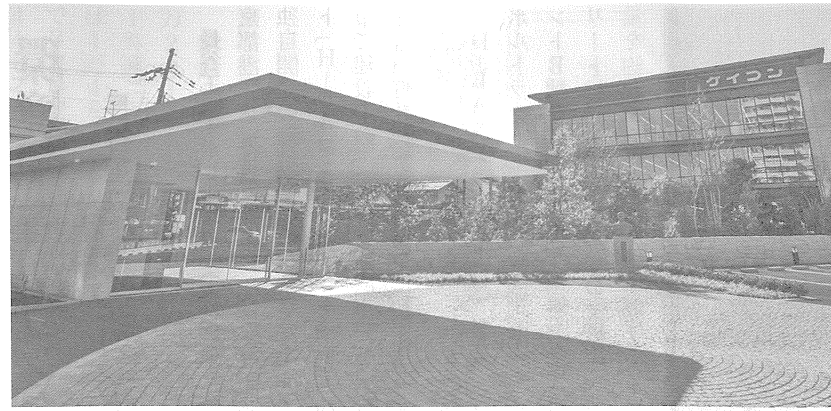
必要諸室を2階以上に置くことと2階の階高を上げることで、未曾有の災害で付近を流れる桂川が氾濫するリスクに備えている。本社棟のファサードはガラスを多用し、外壁には耐震壁のRCを採用。建物内部の庭園に面した北側の執務空間には、鉄骨梁を採用してオープンな大空間を実現。部署を超えたコミュニケーションで、会社全体の一体感が生まれるように配慮した。どこからでも中庭の植栽が見えるように、開口部は全面ガラス張りのダイレクトビューとした。

また階段や吹き抜け、エレベーター、大型の書庫などを配置した南側にはPC丸柱を使用。鉄骨とPCのハイブリッド構造とした。スラブ板やPC梁、PC丸柱など

ケイコン新社屋竣工

NEP工業会が見学会を開催

NEP工業会(会長 荒川崇氏)は11月20日、秋季研修会見学会を開催し、9月末に竣工したばかりのケイコン本社、新社屋(京都市伏見区)を視察した。見学会では設計・施工を行った大林組の担当者が、新社屋建設の基本コンセプトや設計プロセス、建物の概要などを説明した。



竣工した本社屋(※)

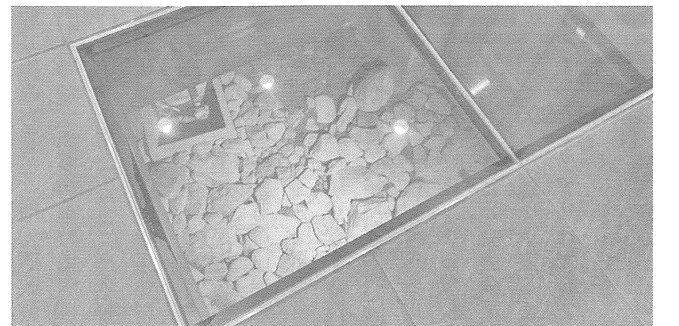
●歴史と最先端が融合する新社屋
ケイコン(社長 荒川崇氏)は1935年(昭和10年)の創業で2020年創業85周年を迎えた。旧社屋は1970年(昭和45年)に大林組が建設した建物。竣工から半世紀近くが経過した2016年に、社屋建替の検討を開始した。当初は旧社屋の耐震補強の検討から始まったが、BCP(事業継続計画)の観点から高い防災機能を持つ新社屋に建て替えることを決めた。着工は18年10月。旧社屋を取り壊し、新社屋を建設するという段階的な施工計画となったため、構想から完成まで足掛け4年を要する大掛かりなプロジェクトとなった。

同社では社屋建替にあたり、社内に20代の若手社員も含めたプロジェクトチーム立ち上げ、大林組とのディスカッションを重ねながら建替計画を策定した。ケイコンの本社屋は淀城の本丸や天守台、二の丸、石垣、内堀などの遺構が残る淀城跡公園に近接している。淀城は江戸幕府が松平定綱に命じて築いた城で、1623年に完成。豊臣秀吉の側室、淀殿が嫡男を出産した淀古城や伏見城の築城に使われた資材が使われており、その歴史は室町時代後期の1478年までさかのぼる事ができるといふ。その様な背景も含め、新社屋の基本コンセプトを「淀城の再構築」に決定した。旧建物の解体後に行われた埋蔵文化財調査では、敷地内から淀城二ノ丸の城壁が見つかった。遺構が発掘されたこともあり、淀城の配置計画や平面構成を新社屋の設計に取り入れ、淀城の構成と記憶を現代オフィスに再構築することとした。また発掘された城壁を、そのままの状態で見せられる工夫を試み、過去

から未来を紡ぐ新しい本社ビルを計画した。新社屋は、かつての淀城を構成していた天守・多門櫓(たもんやぐら)・櫓の関係性を踏襲して、淀城を現代に再現したユニークな空間となっている。敷地と道路の間には城壁をイメージした石垣を設置し、櫓にあたるエントランス棟や、多門櫓にあたる半屋外空間の歩廊を配置した。天守にあたる本社棟はガラスのファサードで覆われ、淀城の重厚感と最新のオフィス空間という新旧の融合を表現している。



歩廊から本社棟へ



床の一部をガラス張りにして出土した淀城の城壁を展示

(※はエスエス大阪支社による撮影)